

兼子重光

「八重の桜」と共に咲く —民権闘士から牧師になった会津人—

もと い やすひろ
本井 康博 (大学神学部教授)



会津出身学生の集合写真(1888年か翌年)
前列左端は吉岡安栄(八重の姪)、中央は山本覚馬。中列左端は今泉真幸、4人目が鈴木彦馬。
後列左から兼子重光、新島襄、新島八重、松平容大、望月興三郎(?)。(同志社社史資料センター蔵)

同志社入学
兼子の新局面を開いたのは、同志社である。逃亡中に京都に入って、八重の夫(新島襄)と兄(山本覚馬)が発起した同志社に入学する。28歳の社会人入学である。「杉山重義の示唆によつて、会津の山本覚馬に拾われ」と言われたりもするが(内海健寿『会津のキリスト教』125頁、キリスト新聞社、1989年)、同志社社員(理事)であった覚馬の勧めが決定的である。身の危険を避けるために逃げ込んだのが、同志社であった。

同じ会津出身の教育者、井深梶之助(明治学院総理)は、ある時、京都の山本宅で、覚馬から持論を聴いている。「とくに日本の徳育は、将来どう

■ 会津から京都へ

兼子重光の生涯(1858年〜1940年)は、新島八重のそれ(1845年〜1932年)とほぼ重なる。しかも、ふたりは濃厚な会津人である。全国的にほぼ無名、という点でも共通している。14年前に私がまとめた兼子小伝(拙著『京都のキリスト教』259〜269頁の「兼子常五郎」、日本キリスト教団同志社教会、1998年)が、いまもつてもっとも詳しい、という凶作である(以下、「兼子」として引用)。

兼子は会津(勝常村)の寺に生まれ、栃木の師範学校に学んだ。郷里で小学校教員をしていた時、三島通庸(三島)の庄政に対して、県民の憤激が沸き起こった。兼子も自由民権運動に従事して抵抗した。運動中、いわゆる「福島事件」(1882年)に連座して起訴されたり、拘引されたりした。釈放後も官吏侮辱罪で追い打ちを掛けられた。そこで身の危険を感じて、一時は鹿児島まで落ち延びた。1885年9月には、京都に落ち着いた。会津から京都に転じた点では八重と共通する。八重には会津戦争が、兼子には

それに続く民権運動が、それぞれの人生の修羅場となり、転機となった。

1885年に入学会後、新島襄(校長兼牧師)の感化を受けて、翌年3月に新島から洗礼を受けた。その後、神学校別課(日本語主体の神学コース)に進み、牧師への道を歩み出した。

卒業は1891年6月で、すでに新島は他界していた。二代目の同志社社長であり、同志社神学校長の小崎弘道の名前で出された卒業証書が、会津に残っている(岩澤信千代『不二——新島八重の残したモノ』150頁、アイミライ、2012年)。

卒業後は、もっぱら地方伝道に専念した。彦根教会(滋賀県)、落合教会(岡山県)、そして会津若松教会(福島県)である。会津に赴任後2年にして、名前を常五郎から重光に改名した。

会津での在任は、34年にも及んだ。引退後、教会は「名誉牧師」の称号を兼子に贈った。僧侶になるべきはずの兼子は、生涯の大半をキリスト教伝道のために捧げた。経済的に報われることが少ない中で、「敢えて風雪を侵して」開花する寒梅にも似た生涯であった。

■ 同志社入学

覚馬が新島襄を支援して同志社を共に立ち上げたのも、精神教育(徳育)を重視する新島のキリスト教主義教育に共鳴したからにはかならない。兼子に対しても、覚馬は諄々と説いた。同志社に入り、「識を博く、人格を練るべし」と。兼子は「同志社は基督教の学校なるを以て、堅く入らず」と抵抗した。が、選択肢はほかになかった。兼子は、「余儀なき場合にて、止を得ず入校せしめらる」(兼子『261頁』)。こうして、兼子は覚馬に匿われた。

■ 闘士から信徒へ

入学直後の彼は、級友の目には異様に映った。なにしろ、俠客、「会津小鉄の子分」にして、「自由党の壮士」である。元旦には、朝早くから潔斎し、寮の自室に端坐して、自由党の宣言書を朗々と読み上げる。「気骨稜々の熱血児」であった(兼子『259頁』)。

兼子にしてみれば、余儀なく入学させられた学校だけに、「大嫌なる基督教」に辟易したもの、無理あるまい。しかし、



兼子重光(小崎弘道旧蔵)

同志社の校風は、確実に兼子を変えた。同志社の精神教育を受けて、人生の目標を大転換させるに至る。その契機は、新島校長の熱烈な祈りである。「実に予の肺肝を感動せしめ、全く思想、感情をも一変するに至れり」(兼子「259頁」)。兼子はその新島から1886年3月14日に同志社教会(寺町の京都第二公会時代の会堂)で洗礼を受けた。その後、兼子はさらには神学校に進み、新島と同じ路線を歩むことになった。

それにしても、なにしろ晩学である。英語などの学習は、非常な労苦を伴った。日本語神学コースでも、最低限の語学は必要である。任意科目として英語の授業をとったつもりが、合否試験が課せられることを知った兼子は、友人2名と学校

志社の徳育に期待をかけたという。元家老の山川浩から新島に宛てた依頼状にもその旨の期待が表明されている。その手紙を読んだ井深梶之助によれば、「旧藩主は、未だ若年の事である故に、宗教上の教養に就いては、特に「新島」先生のご薫陶を仰ぐ」といった文言があったという(兼子「262頁」)。

容大は、青年とは言え、幼児の折には、斗南藩(現青森県)の藩主であった。会津戦争で容保のために生命を捧げて戦った八重にしてみれば、彼の入学は光榮な出来事である。まさか自分が、若様を校長夫人として同志社に迎えるようとは、夢にも思わなかったであろう。

■容大の退学騒動

容大の入学直後(2月16日)、教員会議で彼の学力(成績)が問題視されている(Doshisha Faculty Records, p.157)。結局普通科2年に入れられたようである。

その後、すぐにひと悶着が降って沸いた。彼の入浴は、冬休み中で、1月の始業(転入学)まで学内の寄宿舎に仮住いした。この間に不祥事が起きた。正月に大阪に出かけた際に、色街で遊んでしま

当局に抗議する、という一幕もあった(Doshisha Faculty Records 1879~1895, pp.247~248、同志社史資料室「2004」)。勉学以外では、彼の活動が周囲から大いに期待された。その典型が伝道活動である。学園教会となった同志社教会の役員として、柏木義田や津下紋太郎などの神学生と伝道師並みの働きをした。とりわけ、柏木とは、年齢も近く(兼子が2歳上)、類似点が多い。出自は僧籍(しかも北日本の)、師範学校出身の元小学校教員、中年時の入学(社会人入学)、入信時期の遅さ、信仰の強さといった点で、ふたりは双璧であった。卒業後も、かたや会津若松、かたや安中という地方都市で、他に移ることなく、30年以上にわたって、伝道に終始した点でも、軌跡を同じくする。

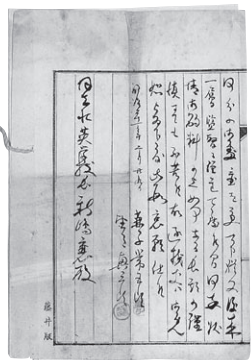
■会津人学生の後見人

兼子は年配学生として、同郷の後輩たちの後見人でもあった。当時は、山本覺馬や八重の繋がりがから、二けたの生徒や学生が会津から入学していた。覚馬も、何名かの学生を自宅に引きとった、という。こうした会津グループの束ね役が、

ったことが、2月になってから、明るみに出たのである。

ピューリタンの規律が厳格な学園だけに、即刻退学に値する行為である。たとえ、正規の入学以前の行為でも、入学を取り消す、という異例の処分が予想された。放っておけなくて、兼子は容大の指導に及んだ。新島校長に「自首」させる一方、自ら助命運動を展開した。驚いたことに、兼子が在籍する別課神学の全学生、33名が署名を連ねて、命乞いをして2月29日に新島校長に出された。

「私共、同人監督の委託を受け居る者」として、「哀願」する。いまだ一度も同志社の教育や指導を受けていない時点での過ちだけに、赦していただきたい、そ



書願助命退学容大平松 (同志社史資料センター蔵)

望月興三郎と並んで兼子であった。グループのひとり、鈴木彦馬(喜多方出身)は、八重からも可愛がられた。長期に家を空ける場合、八重は留守番のアルバイトを鈴木に頼んだ。鈴木は結婚相手は、同志社女学校に学んだ吉岡安栄である。彼女は、八重の姉(窪田浦)の孫娘なので、鈴木は八重の遠縁に納まるわけである(鈴木について詳しくは、拙稿「新出資料の紹介」、「同志社談叢」33、2013年2月を参照)。

今泉真幸(1871年~1966年)も、在学中、兼子の影響を強く受けた会津人学生である。同志社神学校を出た後は、ジャーナリスト、教員、牧師などを経て、同志社系教団の全国的な指導者、ならびに日本聖書協会の理事長などを歴任した。

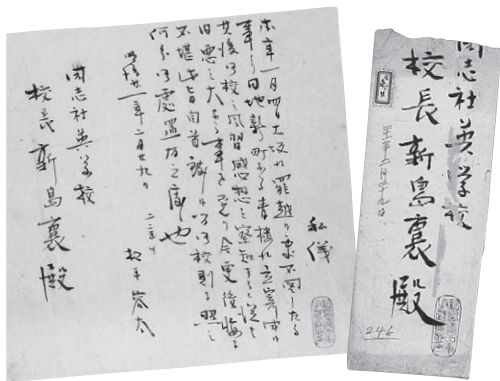
会津の学生の中で特異なのは、何と言つても、「若殿」である。彼が入学するに及んで、後見人の兼子の働きは、急激に高まった。旧会津藩主・松平容保の長男、容大が、1887年末に東京の攻玉社から転校してきたのである。兼子によると、東京では「諸兄の学校」に入るとの続かず、「最後の一策」として、同

れ以降の素行も決して悪くない、もとより、「監督者たる私共の不行届の罪」でもあるので、自分たちも「何分の御処置」を受ける覚悟である、いかなる「長期の謹慎」でも構わない、しかし、「逐校」だけは避けていただけないだろうか、というのである。

兼子の指導力は、圧倒的であった。「多感な容大は、長ずるに及んで、ようやく性、奔放不羈となった。乃、父、容保はこれを心配し、旧藩主の主だった者とも相談し、補育役に河沼郡勝常村出身の兼子重光を起用した。兼子は、新島襄の同志社に入学して牧師となった人で、武士の気骨と人世の機とを知っているだけに、容大補育役には最適だったし、この人の云うことは、よく聞いたそうである」(益田晴夫『会津こぼれ草』23頁、小林印刷所、1952年)。

■覚馬も動く

容大の退学騒動では、覚馬も動かざるをえなかった。大物の介在に、学校当局は対応に苦慮したであろう。が、特別扱いはせずに、3月1日に、早々と退学処分を下した(Doshisha Faculty Records,



松平容大自首の手紙(同志社史資料センター蔵)

p.158)。この間、新島校長も同僚と覚馬(と八重)の間で、板挟みの苦悩を味わったはずである。

しかるに、その後も容大や彼の周辺は、復学を希望していた。4月26日の教員会議で、「再入学の件は、秋まで持ち越す」との決議が出た(ibid., p.164)。期待を抱かせるような決議である。特例として、退学処分はひとまずお預けとなった、と理解もできよう。実態は違った。次のような入学不可の通知が、覚馬に出された。

「松平容大殿再度入校之儀、教授議會ニ提出候処、目下許可シ難シトノ決議ニ候間、此段御通知申上候也 委員 ラルネット、森田久万人 山本覚馬様」(『新島襄全集』1、299頁)。

この文書は、覚馬が前面に出て、問題を解決しようと尽力した消息を明白に示している。覚馬はおそらく文書で要請したのである。覚馬の力をもってしても、事は好転しなかった。それだけに、新島としては、校長としての指導性にジレンマを覚えたはずである。

秋学期(新学期)を迎える9月13日には、再審議にかけられた。その結果、正式に再入学が認められた。ここに至って、兼子や覚馬などが繰り広げた助命運動が、功を奏した感がある。ただし、仮の決定らしく、10月に及んで、「来週末までに全科目に無条件合格」という条件で、2年編入を認める」と再決議されている(Doshisha Faculty Records, p.164)。

命拾った容大であったが、若殿の京都生活は、長くは続かなかった。翌年(1889年)2月7日には、父親自身が「徴兵令之次第切迫」につき、「学習院江入塾之事ニ相成」という転校希望を新島に

申し入れてきた(『新島襄全集』9下、696頁)。

後年のことであるが、容大の入学に際して、山川浩が新島に送った手紙を、新島の死後、八重は井深樞之助に贈呈した。井深はそれを松平家(山川健次郎)に譲った。今年の9月に会津で、現在のご当主(松平家14代の松平保久氏)にお会いした際、私は手紙の件を尋ねてみた。所在不明とのことであった。

■ 会津の小鉄

兼子の学生時代でさらに注目すべきは、京都有数の侠客、「会津の小鉄」との繋がりである。詳細は、『京都のキリスト教』(264~269頁)で紹介した。小鉄の大親分は、大垣屋清八(天河ドラマ「八重の桜」では、同志社高校時代の私の級友、松方弘樹氏が演じる)といい、その養子が大沢善助である。善助、徳太郎、義夫の三代は、クリスチャン実業家・同志社社員(いまの理事)として、新島や初期同志社を経済的に支援した。会津の小鉄も、会津藩の預かりであったために、覚馬との接点が生まれてくる。

こうして、覚馬の門弟とも言うべき兼

子もまた、小鉄に接触し、小鉄が邸内に設置した小鉄小学校(会鉄学校)の教師として働いたことがある。小鉄の邸宅に入入りするうちに、兼子はいつしか「小鉄の子分」視されるに至ったのであろう。

■ 結婚と養子縁組

兼子は二度、結婚している。妻はふたりとも、会津人ではない。先妻(新井キク子)は、群馬県人でフェリス女学校の卒業生(『基督教新聞』1897年2月5日)。横浜海岸教会の会員(信徒)でもある。結婚式は1895年4月、東京の番町教会で行われたが、新婚生活は一年半足らずで終わった。キク子の葬儀は



兼子重光・健子夫妻と義一
(『会津若松教会百年の歩み』)

東京の(弓町)本郷教会で行なわれた。二度目の妻(茂木健子)は、大阪出身である。式は1900年11月に、大阪にある(同志社系教団の全国的な伝道組織である)日本伝道会社内で行なわれた。

その5年後(1905年)、夫妻は若松市神指の鈴木家から義一(1903年~1939年)を養子にとった。翌月、ただちに幼児洗礼を授けた。会津中学校から同志社中学校に転校した後、早稲田の高等学院から早大政治経済学部に進んだ。大学在学中はラグビー部で活躍した。

義一の学資調達は、地方牧師の家計では至難であった。「貧困に貧困を重ね、多年の学資金故、容易の事柄に無之、甚だ困難を極め申候」であった。見かねた先輩牧師の長田時行が支援を申し出た(長田時行宛て兼子重光書簡、1926年6月7日付、同志社大学人文科学研究所蔵)。援助は、義一の大学卒業まで継続されたようである(同前、同年7月30日付)。

義一は早稲田卒業と同時に幹部候補生として麻布第三連隊に入営。第二次大戦に出陣して戦死した。兼子は、葬儀の3カ月後、小冊子、『故陸軍歩兵准慰兼子

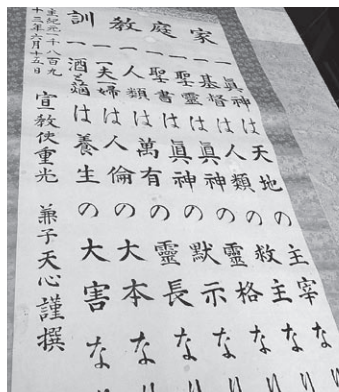
義一』(私家版、1940年)を自費出版して、その死を悼んだ。

■ 会津伝道の成果

牧師としての兼子の伝道方針は、「雪霜の会わずば、麦実らず」という彼の愛誦句によく表われている(『会津若松教会 百年の歩み』91頁、同教会、2001年)。かつての民権闘士当時の信念をベースにしているとも思われるが、ここが新島の「敢えて風雪を侵して開く」寒梅の開花姿勢と重なるものがある。

信徒個人、あるいはクリスチャン・ホームが守るべき具体的な指針として、七カ条からなる「家庭教訓(1893年)も発表している。1907年1月には、自給独立宣言式を挙行して、ミッションからの経済的自立をめざすことを表明した。

兼子の働きは、ハード面でも目につく。馬場口への会堂と牧師館の移転、改築、新築である。1902年、八百余坪を千円で買収した。ここから始まる馬場口時代(1915年までの十数年)が、「若松教会の全盛時代」である(『日本組合若松基督教会略史』28頁、同教会、19



「家庭教訓」(会津若松教会所蔵)

40年)。

教会外の活動を見ると、早くに1893年に若松書籍館を設置している(同前15頁)。この地方で最初の図書館である。

■青年伝道者の育成

兼子の宗教的感化と指導により、若松教会からは伝道師志望の青年が巣立った。ひとり目は、二瓶要蔵(1884年〜1988年)である。

会津若松に生まれ、1901年、会津若松教会で兼子牧師から洗礼を受け、同志社神学校に進んだ。英米留学を挟んで、松山、京都(洛北)、巢鴨、伊勢原などで伝道に従事した。

二人目は、遠藤作衛(1889年〜1

953年)で、会津の門田町出身。会津中学校在学中に、会津若松教会で洗礼を受ける。同志社大学神学部に進み、在学中から開拓伝道に取り組む。卒業後は、牧師として世に立った。遠藤彰教授(神学部。故人)は、子息である。

三人目は、小林美登利(1891年〜1961年)。会津高田に生まれ、1905年、同志社中学校に入学する。在学中に受洗する。同志社大学神学部を終えてから、アメリカ留学をし、ついでブラジルに渡る。聖洲義塾を立ち上げ、日系移民のために貢献した。

■海老名夫妻の働き

伝道師に匹敵する人材として、ほかに海老名季昌・リン夫妻がいる。海老名は会津藩家老の家に生まれ、若い頃、徳川慶喜の弟、徳川昭武がパリ万国博へ出張した際、同行して海外見聞を広めている大河ドラマで言えば、かつての「獅子の時代」(1980年)で菅原文太氏が演じた役(平沼銚次)は、海老名がモデルと言われている。

戊辰戦争後は、若松町長に就任する。後半生は、夫妻して熱心な信徒として、

松教会に転会した。直後に赴任してきた兼子の指導を受けるかたわら、教会役員として兼子の強力な支援者となった。彼女は、若松で最初の幼稚園と女学校を設立するなど、キリスト教育者として、社会的な活躍をする。1893年、地元的女性たちと若松婦人会を立ち上げ、副会頭に就任した(『基督教新聞』1893年3月3日)。1900年には兼子に協力して会津矯風会を設立した。

■会津女学校

海老名リンが創設した女学校は、私立

高等学校である。同校が新島八重の書で



左から兼子重光、兼子健子、新島八重(代筆)の短冊(会津若松教会蔵)

四点、所蔵するのも奇縁である。八重の書と言えば、兼子の養子(義一)につながる会津教会員にも、「日々是好日」という書が残されている。また、兼子の甥に宛てた八重の書簡が書と共に、会津の岩澤家に保存されている(『不二』157頁、201頁)。



海老名リン (玉川芳男編著『海老名季昌・リンの日記』)

社会的な活動にも貢献した。海老名が信徒になるには、妻(リン)の働きと祈りが大きい。一時は、離婚の要因になったほど、夫はキリスト教徒であった。

しかし、1903年、ついに海老名は会津若松教会で兼子から洗礼を受けた。かつての自由民権運動では、三島県令の側近として兼子らの民権家を取り締まる立場にあったことを考えると、信仰を絆し和解したことになる。

一方のリンは、1888年に東京の靈南坂教会(同志社系)において39歳で綱島佳吉(同志社神学校卒)から洗礼を受けていた。東京では、日本基督教婦人矯風会東京支部の副支部長を務めるなど、社会活動も旺盛であった。

夫の帰省に伴い、若松に戻り、会津若

会津に残る八重のこれらの書は、いずれも兼子がらみである。

■八重の会津訪問

兼子は、八重とは終生の繋がりがあった。八重も兼子の牧師在職中に会津を訪ねている。たとえば、1921年には山形市に住む養女(初子)の家族(広津友信一家)の所へ行った帰り、わざわざ道を枉げて、会津に廻っている。帰省が直接の動機であるが、兼子に面会することも、いまひとつの目的ではなかったか。

そのことは、会津からさらに安中にまで足を伸ばしていることにも窺える。同地では柏木義円に出迎えられている。思うに、裏の故郷、安中には、裏が「あなたにコンフィデンスを置く」と言つて同志社から送り出した教え子の柏木義円が、裏の遺志を継いで伝道に尽力中である。八重にすれば、一方の自分の故郷、会津若松には、これまた裏の教え子であり、兄(山本寛馬)の門弟とも言うべき同郷人の兼子が、腰を据えて、会津伝道に生命をかけている。長年にわたる柏木、兼子両氏の獅子奮迅振りは、八重にはさぞかし、頼もしく見えたことであろう。